北海道の衣服の一考察

―― 福島町白符における明治・大正・昭和にかけての聞き取り調査から ――

A Regional Survey on Clothing Habits of Hokkaido During the Meigi, Taisho, and Showa Periods

―― A Case of Shirafu District in Fukushima-cho ――

澤　田　幸　子　　斎　藤　祥　子※
Sachiko SAWADA　　Sachiko SAITO

Ⅰ　は　じ　め　に

急変する地域の生活を記録しておくために，各地で民俗調査がさかんに行われるようになってきたが，衣生活においても例外ではない。

しかし本州にくらべ北海道における衣服の実態調査報告数は少ない。例えば高橋春子ほか編『衣の民俗叢書，労働着　Ⅰ』明玄書房　1979年。同『衣の民俗叢書　労働着　2』1982年や，近年全国的に実施された神奈川大学，日本常民文化研究所編『仕事着－東日本編』平凡社1986年，同『仕事着－西日本編』1987年，などは北海道が省かれている。

今日われわれの着装は，昭和35～36年以降の高度成長期を境いとして，既製服志向は徐々に昂まり画一化の傾向は著しい。このような機に，明治から大正，昭和に至る着装について，どのような工夫がなされてきたかを知ることは，北海道における着装の歴史の実態の一端と，今日のわれわれの衣生活の形成過程を知ることにもなる。

そこで筆者らは，昭和62年７月29日から８月12日にわたって行われた，宮良高弘教授を代表とする北海道福島町白符の生活文化調査に加わった。その結果は『北海道を探る―福島特集―』北海道みんぞく文化研究会，1988年，において既に衣生活についての全様にわたり報告したが，今回はそのなかから，福島町白符および北海道の特徴をあらわしているとおもわれる仕事着と，衣生活習慣を形成している要因に焦点をしぼって考察していく。

Ⅱ　調　査　方　法

白符在住の明治・大正生れの高齢者からの聞き取りを中心に，また家々に保存されていた実物，写真等の資料に基づき調査を行った。

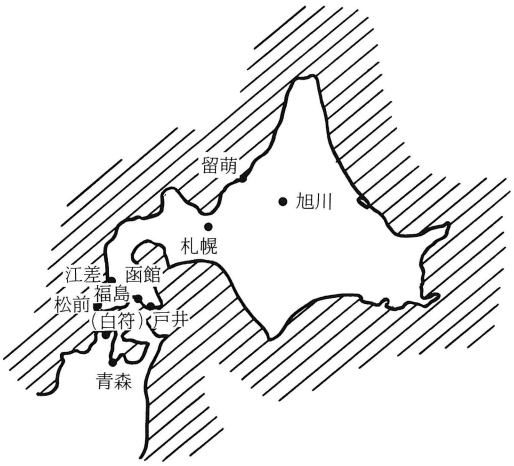
※　北海道教育大学函館分校（Hakodate Callege, Hokkaido University of Education）

Ⅲ　結果と考察

1．地域の概況

「鳥多きところ，白鷹の産地であったために名づけられた」と『松前誌』（松前広長著・天明元年・1781年）に記されている福島町白符は，現在戸数191，人口約640をかぞえる地域である。

図1　調査地－白符とその周辺



松前藩が成立しつつあった文安４年（1447年）「陸奥国の馬之助がニシン漁をなす」という，北海道最古のニシン漁発祥地との記録が残されている白符は，その後，数年毎に豊凶期をむかえるが，ニシンを含む漁場として栄えてきた。

しかし，明治36年を境いに，ニシンの群来は北へ移動していく。そうして，ニシンに変り，イワシの大漁を見るようになる。

白符の漁場はオオヤケ（網元）２軒が支配し，住民の多くはブカタやデメンに雇われ，ヤドイと呼ばれる漁撈者は，対岸の津軽や下北，上北の漁村や八戸出身者が多く，遠くは新潟や能登からの出稼ぎも見られた。

明治末期以降，日本海沿岸を北上するニシン場を求めて，白符の人々も留萌や礼文，樺太，さらにカムチャッカ方面まで，出稼ぎにいった。

このように古くから漁業のさかんな地域であるが，集落の北側後方には西から東に走る山脈があり，漁業とともに山仕事にもたずさわってきた。これらの地形的環境には，青森県側の津軽海峡沿岸地域と類似性が多くみられる。

また，江戸時代以降，天明の大飢饉等の影響で，南部や津軽から松前をはじめとする道南地域へ多数の移住者を見たことや，出稼ぎ等による物質の交換，流通，それらに伴う婚姻関係への広がりを持つなど，津軽や南部とは極めて深いかかわりのある地域といえる。

2．白符の衣生活

明治から昭和にかけて白符において着用された仕事着は，表１のようである。（表の一部は『北海道を探る―福島特集―』から抜粋）。

この中から特徴の見られた仕事着について，防寒着を中心に考察していく。また衣生活をささえている生活技術面と，生活の基礎として白符の衣生活習慣を形成している（具体的には先に述べた『北海道を探る―福島特集―』参照）一要因を通過儀礼・年中行事の中で大きな意味を持つアカとシロの色彩をとおして見ていく。

表1　仕事着の種類

地域名称と一般名称　性別	男		女	
種類	地域名称	材料・形態・色彩・その他	地域名称	材料・形態・色彩・その他
かぶりもの	てぬぐい	日本手拭、ほっかぶり、はちまき	てぬぐい	ほっかぶり、あねさんかぶり、はちまき
	ふろしき	ネル・絹天、黒		
	ぼうし	犬の毛皮		
	アンカーシャポー	毛糸	ふろしき	白木綿、三角に折ってかぶる。
	スキー帽子	ラシヤ、黒		
上衣	みじか	木綿・わた入れ、膝丈	きたぎり	対丈の着物、単衣、袷、わた入れ
	はんてん	印半天・単衣	みじか	木綿、腰丈、わた入れ
	どんじゃ	刺し子、つづれともいう	うわっぱり	木綿、腰丈、単衣
	ばばじる	わた入れ、そでなし	どんじゃ	木綿2枚重ねて刺す、腰丈・膝丈などさまざま
	そでなし	わた入れそでなし、脇にサシワが入る。		
	シャツ	ニシジン・メリヤス	ばばじる	木綿、並巾前後4枚のわた入れ、袖なし、襠は入れない。
	ジャケツ	毛糸		
	ナッパ服	綿ズック、青色	そでなし	綿入れ、肩幅がせまく、脇に襠が入る。
	胴着	チョッキ、アカゲット、犬の毛皮		
下衣	ももひき	ニシジン・ネル・アカゲット、季節により単、袷、綿メリヤス・毛メリヤス	こしまき(ゆまき)	木綿・イタリヤ・タオル・メリンス単衣、袷
	ズボン	綿ズック（ナッパ服の下衣）コール天、ラシヤ	もんぺ	木綿、黒・紺、カスリ
下着	シャツ	白木綿・綿メリヤス	はだこ	肌じゅばん、晒、ネル
	ふんどし	白木綿～6尺、越中、若い人は赤		
	さるまた	股のついた短かいももひき	こしまき(ゆまき)	下衣と同じ
	パンツ	綿メリヤス		
外被	ケラ	わら・しなの木、肩から背中を覆う。	ケラ	男と同じ
	メッケラ	海草、胴から下につける。沖に着る。		
	カッパ	単衣着物やどんじゃにボイル油を塗って防水	ゴムカッパ	
	ゴムカッパ	ゴム、洋服型		
服物	ひも	木綿、袋に縫う、なわ	ひも	木綿、メリヤス、袋に縫う
	めんだれ	帆布、ゴム	おび	木綿、メリヤス、幅/2・幅/3・幅/4など、芯を入れる。
	てがけ	白天竺、内側は刺す（手袋）		
	てっけし	わた入れ、手袋、内側は布を重ねて刺す。	めんだれ	並幅、大幅、三幅、袷、単、白や黒のひもをつける。
	腕ぬき	黒、上下にゴム	てっこ	紺木綿、色糸で刺繍。手甲のこと。
	ほし	きゃはん、帆布、赤ゲットネル、巻きほしはゲートルのこと、ラシヤ	てがけ	天竺木綿、内側を白糸で刺す5本指の手袋、わた入れ手袋、内側は布を重ねて刺す。
	わらじかけ	タビ、木綿、底周囲を細かく刺す。	てっけし	
	わらじ	わら	腕ぬき	黒、上下にゴム
	わらぞうり		ほし	きゃはん、木綿、帆布、アカゲットネル
	つまご		わらじかけ	木綿、底は細かく刺す。
	ふかぐつ		わらじ	わら
			わらぞうり	
			つまご	
			ふかぐつ	
	たかじょう	底はゴム、甲は厚地木綿	たかじょう	底はゴム、甲は厚地木綿
	ゴム長靴	ゴム	ゴム長靴	ゴム
	とくなが	ゴム	とくなが	ゴム

(1)　仕事着

男の沖着は夏は「ふんどし」だけであった。夏の季節をのぞいて，この地域では古くから沖や山，その他，いづれの作業にも常に着用された上衣に〝みじか〟と〝どんじゃ〟があり，みじかはわた入れ，どんじゃは刺し子で，両者とも丈の短かい仕事着である。

みじかやどんじゃの上衣と組み合わせた下衣は男は〝ももひき〟女は〝こしまき〟という，二部式の構成が主であった。

これらの上衣は季節や天候によって，どんじゃの上にみぢかを着ることもあり，また，わた入れそでなしやばばじる（p 81，ばばじる参照）を重ねて着るなど，みじかやどんじゃ，ばばじるをはじめとする，わたの入った衣類は防寒や雨具としての役割りも兼ねた仕事着であった。これらの防寒衣の中から，みじかとばばじるを中心に見ていく。

1）みじか

①　みじかの呼称とその分布

長い着物で田畑の仕事をしていた地域は，今までの調査からも多少見られたが，全国的には上下別々で短かい上衣とももひき，腰巻の二部式の仕事着が大勢を占[1]めている。

その中で本州では積雪の多い東北や北陸地方，あるいはその周辺の山間地帯では二部式構成の仕事着の傾向が多く，温暖な中国地方や，九州，四国などは一部式が多かったが，この一部式の着装も，昭和に入って全国的に洋服化がすすむにしたがって，次第に二部式構成へと移行する[2]。

この二部式の上衣は着丈が短かいために，地域によって，こしきり，どうふく，はんこ，はんじばん，などと個有の呼称がなされているが，岩手では「みじかばんてん」秋田県では「みじかきもの」富山県は「みずかもん」青森県は「みずか」と，東北や北陸地方に「みじか」の呼称が多く分布している。

この〝みじか〟の語が，古くから二部式の仕事着を着用していた東北，北陸などで使われたのは，長着に対する短着が〝みじか〟との通称に定着していったのであろうと考えられる。福島町白符は青森県と同じ呼称であることは，津軽海峡文化圏域としては当然のことといえる。

②　白符のみじか

図2は現在80才の人が30数年前に作った〝みじか〟の構成図である。丈や身幅は着用する人の体格に合わせるので，各所の寸法に多少の差はあるが，白符の人々は古くから，この形のわた入れを〝みじか〟といって着用してきた。丈は腰を覆う長さ，じばん式に衽がなく，衿は裾までつく。両脇の裾は馬のりを10㎝前後にする。袖は昔は〝むじり（まき袖）〟もあったが，大正から昭和にかけては，ほとんどが筒袖であったという。

表地は紺無地木綿，裏にはチグサ（裏地用紺木綿地）を用い，ばんわたを入れる。衿には共衿の上に黒衿をかける。図2のみじかは以上のような材料で作られていたが，その他，縞木綿あるいは，古い布などを接ぎ合わせて作ったともいう。

明治35年生れの人が子供の頃は，船で働く人は〝アカふんどし〟（p 84，アカの習俗参照）

図2　白符のみじか

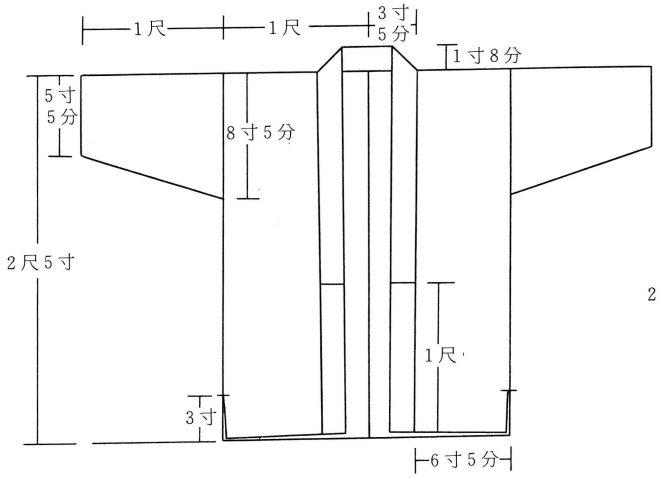
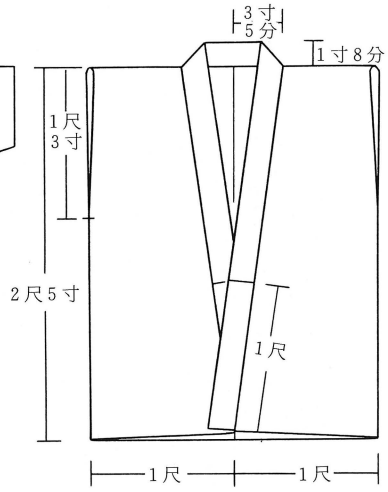


図3　白符のばばじる



をしめて，裸に直接〝みじか〟を着ていたという。みじかは，前側は明けたままで，あるいは，3～5㎝幅の袋に縫った木綿の紐や，わら縄で胴をしばって作業をしていた。

大正中期以降になると，ニンジンのシャツを着る人が多くなり，このシャツは上衣でもあって季節により，この上にみじかやどんじゃを着るようになっていく。

昭和60年に調査を行った道南の戸井町瀬田来[3)]では，白符のみじかと同様の仕事着が着られていたが，この地域では，みじかという人は少なく，ちゃんちゃんこ，または，わた入れちゃんちゃんと呼んでいる。

2）ばばじる

①　白符のばばじる

白符には〝ばばじる〟と呼ばれている，わた入れそでなし〔図3〕がある。白符で通称〝そでなし〟というのは写真1のように肩幅がせまく，脇にサシワ（まち）の入った形態をいう。

〝ばばじる〟は，白符のみじかの袖をつけない前の，身頃だけの形であって男も女も，みじかやどんじゃの上に防寒衣として着用した。特に母親は，子供を負って仕事をしなければならなかったため，袖が邪魔にならず便利であったという。また子供を負るには，袵をつけて身幅を広くしたという人もいる。

②　津軽のばばじる

写真2は大正5～6年頃に，津軽から松前に出稼ぎにきた人が松前町白神の福原家に置いていった仕事着である。表は黒っぽいタテジマ織り，裏は染め模様で，いづれも木綿地のわた入れである。この裏布はばばじるにつける以前は，半天の表として着ていたが，古くなったために裏用にまわしたものという。

白符のみじかに比べると，津軽のばばじるは，やや丈長であるが，形態，作り方ともに両者同じといってよい。津軽の人はこれを〝ばばじる〟と呼んでいた。

写真1　白符のそでなし

写真2　津軽のばばじる

そこで松前に住む古老に聞き取りを行った結果，松前では写真2が〝ばばじる〟であると答え，袖がついていることを強調した。

また青森県の津軽海峡沿岸で，津軽と南部の境いに馬門（南部領）という小地域がある（北海道を探る―野辺地町馬門特集―1989年　発刊予定）。この地域では，津軽のばばじると同様の仕事着が着られているが，この地域では〝さなだ〟と呼んでいる。

3）継承と変容

白符の人々は，みじかを着て働くときに，袖が邪魔になるときは，利き手の袖を半分に切り取ったものだという。内側に折り込むこともあるが，明治41年生の関イク氏は，作業には，切り取った方が動きやすかったという。女たちは，背中に子供をくくりつけて立ち働かねばならなかった。したがって袖のある，ねんねこばんてんでは動きが取れなかったのであろう。

生きるために，働くために，必要にせまられて，次第に形が変化していったのが，白符のばばじるではなかったのかと推測される。

白符は概況で述べたように，津軽，南部ともに，さまざまな形で，多くの交流があるなかで，白符のばばじるの場合は，松前を経由し，呼称については津軽地方の影響を受け継いでいることが認められた。しかし，形態においては，衣服の合理化にむけて変容していった事例のひとつと見てよいのではなかろうか。

(2)　生活技術

1）刺し

明治から昭和にかけて，漁業の女たちには東北，道南ともに「どんじゃ刺し」といって「刺

し子」「つづれ」などと呼ばれている全面刺しの仕事着をつくる作業がある。

この中に，地域特有と考えられる「どんじゃ刺し」の習慣が見られた。一家の主人が，利尻や礼文，樺太方面のニシン場へ出稼ぎにいく三月をまえにして，夫に持たせる新らしい「どんじゃ」作りを，親しい人たちに手伝ってもらうという習慣である。雨の日などに，まわりもちで行うが，朝から集って，夕方までにほぼ刺し上げる。7～8名から10名位集まるので，ときには，ひとつづきの布を向かい合って，両端から刺していく。

これは，東北地方では，時化(しけ)のために海に出られない日に，近所の人たちが小屋に集まって，わら仕事をしながら，技術が伝えられていったことと通じる点があり，このことは，津軽や南部における“ワケモノヤド”（若者宿），あるいは労働力提供による相互扶助等の形態を投影しているように思われる。

しかし，白符の“どんじゃ刺し”の場合は，技術の伝達の意味はうすく，あくまでも協力体制としてあったことに注目したい。

2）　わら

副産物活用文化のひとつとして，日本各地では“わら文化”を持っている。そこで生活技術の面から，白符を見ていく。

漁業においては，滑らないために，また，水捌(はけ)けがよい，などの理由で，入手が困難な地域でも“わら”が広く使われていた。

宮崎清氏[4]の調査では，東北地方は全国的に見てもわらが豊富であり，したがって「わら工芸品」の種類が多いとの報告がある。

白符は津軽からの移住者が多かったためか，わらの技術は発達していた。

阿部富五郎氏（明治35年生）の父親は津軽の出身であり，かんたんな生活用品は勿論のこと高度な技術を要する「いずこ」まで作っていた。

しかし，そうした技術は，次の世代に伝達されることなく，富五郎氏が一家の生活をささえる時代には，日常生活で使われる「わら製品」の多くは，青森県から来る行商人や，福島町の店から購入し，わずかに家族中で使用するわらじやぞうりのみ家々で作るようになっていく。

同じ漁村である戸井町[3]においては周辺の状況からも，原料の入手がむずかしく，わら製品およびその技術は，白符のように発達していない地域であった。したがって，必需品である“わらじ”は米俵をほどいたり，青森県の親類から船でわらやわらじを調達して賄っていた。

このことを比較すると白符は漁業とともに山仕事があるため特に冬期には，わら製品の需要が多く，また，原料は福島町にたんぼがあった関係上，入手が容易であったことから，わら技術は豊かであったといえる。しかし，本州と比較するとかなり簡略化している。

高度な技術を要する“つまご”や“ふかぐつ”“けら”加えて“いずこ”に至っては，イワシの大漁がつづく忙しい生活の中では，伝達を阻まざるを得なかったのではないか。また，豊かな海の資源は，物資の交換を容易にしたことも要因のひとつである。こうした技術の欠落は往々にして豊かさに基因することもある。

(3)　アカとシロにかかわる習俗

1）アカ

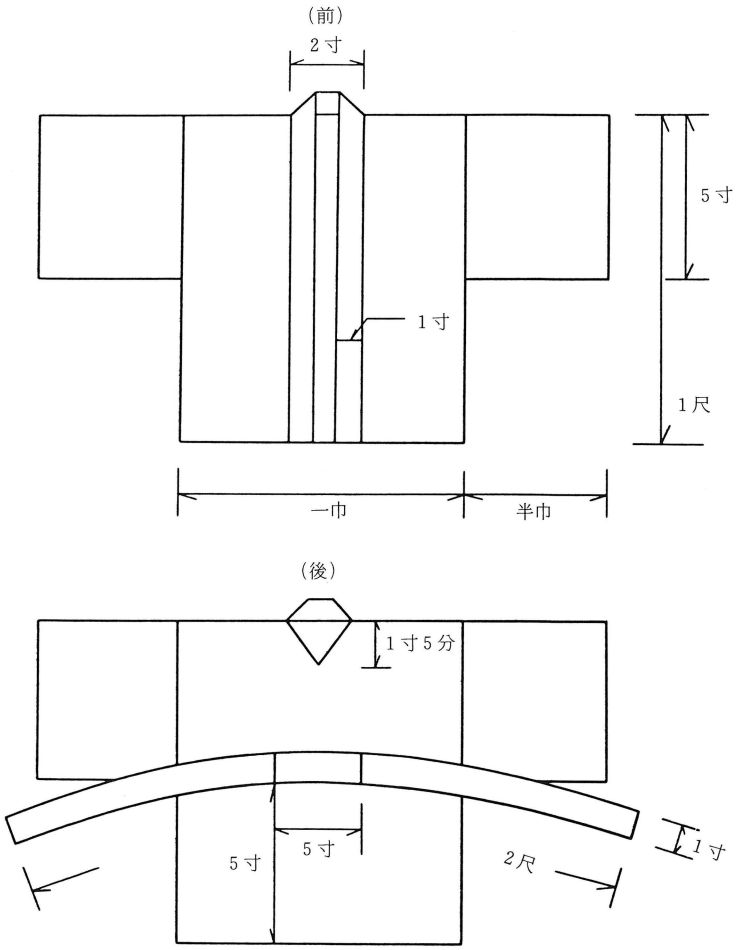
アカについて，ふんどし，産着から見ていく。アカふんどしは明治生れの人は着用した経験のある人もいたが，記憶にない人もあり，この地域では，すべての人に着用されてはいなかった。

また，一般に白符ではアカふんどしを着用した人は若いときのみである。しかし，富山県から渡ってきた人は，年令に関係なく締めていた。

「津軽半島民俗資料調査報告書」1969年によると，津軽では「アカは薬なり」という記録がある。これは，かつて染料になるものの多くが薬草であったことに基因すると考えられる。

また，越中の人は，縁起を担いで，いくつになってもアカふんどしを締めていた事実や，「フカに食べられる」ことから身を守るという本州と同じような「アカ」にかかわる呪術的意味も含まれていることからも，同じ危険をともなう漁業のため，アカふんどしの存在があってもよ

図4　産　　着



いと推測されるが，北海道においては，かならずしも，そのままの形では継承されていなかった。

農業からの転業者もあったであろうし，北海道では，船の上でも，ももひきを着用するという，保温的着装期間が長いため，アカへの執着はうすれ，地域全体の人々が着用するという広がりを阻んでいたことも考えられる。

また，アカにかかわる呪術的思想の衰退は，「産着」にも見ることができる。

本州で見られる，生まれてきた子に赤い産着を着せるという風習も，白符にはオオヤケ層に見られるのみで，一般には黄等の他の色彩も着せ，特にアカへのこだわりは見られなかった。

また，産着の裁ち出しの三角の背守りは，東北地方（『東北民俗資料集㈡』）で見られる風習には，三角の布の上に赤い糸で模様刺しにとめているが，白符では産着（図４）を縫ったと同じ色の糸で，とめられているだけで，ここにもアカへのこだわりは見られなかった。

２）シロ

次に，葬式にかかわるシロを見ていく。

親しかった婦人たちが，死者の着物を白いさらしで縫うが，糸の端を玉留しない，はさみを使わない，裾縫いはしない，といった習慣は，本州（岩崎敏夫編『東北民俗資料集㈣』萬葉堂書店1975年，Ｐ13）や他の北海道地方（『北海道を探る－雨竜特集　その１－』1985年　Ｐ60～61等）の調査地でも見られた。

参列をする女は白いメリンスやキャラコの単衣仕立ての対丈の着物をはおり，「シロいぼうし」と呼んでいる四角い布をかぶる。

男は，黒っぽい着物の上に「はんてん」とか「はおり」と呼ばれる白い単衣仕立ての，丈の短かい着物を着用する（『北海道を探る－白符特集－』1988年），といった風習は，全国的に共通している。

日本では，古来から白に対しては白山信仰等の歴史があり，葬式におけるシロの着用の由来は，このあたりに遡る。

しかし，本州には，死者に着せる白衣を「経衣」とか，色無しの衣の反語として「イロ」と呼ぶ地方もあるが[5]，白符では死者に着せる白衣にも，葬式に参列する人の白い着物も同様に「シロ」と単純な略称になっている。

以上，白符における衣生活は，本州，特に津軽と共通した部分を多くみいだすことができる。しかし，それらは同一ではなく，北海道の自然環境，社会環境にあわせつつ変容されて，白符の衣生活となっていた。

Ⅳ　ま　と　め

福島町白符における衣生活調査から防寒を主とした仕事着と生活技術，また通過儀礼，年中行事の中でもハレの色彩として大きな意味を持つアカ・シロにかかわる習俗をとおして北海道の衣服の実態とその特徴をとらえていった。

表１の仕事着の種類からも形態，呼称が東北地方と類似しているものが，多く見いだされた。それらは青森県から移住した人々で成立してきた社会環境と海を挾んだ雪の多い寒冷な自然環境といった共通点を多く持つことからも当然のことといえる。

仕事着の中でも防寒衣をかねた，みじかとばばじるは二部式の上衣として着用され呼称は青森県と同じであった。生活機能に合わせて着装法に工夫が見られ，形態も袖を折り込んだり，切る，など変化していった。

刺し，わら仕事に見る生活技術，また伝承において母村の影響の強く現われる通過儀礼，年中行事に多く見られる衣に関する，アカ，シロの呼称，使われ法はそのままの伝承ではなく，北海道の風土の中でかなり簡略化した形で形成されていた。

最後に，この度，筒井京子先生ご退任にあたり，在職中は多大なご指導を頂き，厚く御礼申し上げます。深く感謝申し上げるとともに，今後，益々のご健勝とご活躍をお祈りいたします。

引用参考文献

1）江馬三枝子：日常生活の衣類－仕事着－，日本民俗学大系，第６巻，平凡社，1985年

2）遠藤武：遠藤武著作集第三巻　民俗編，文化出版局，1988年

3）宮良高弘編：北海道を探る－戸井特集－，北海道みんぞく文化研究会，1986年

4）宮崎清：藁　1，ものと人間の文化史55～1，法政大学出版局，1985年

5）瀬川清子：晴着とかぶりもの，日本民俗学大系，第６巻，平凡社，1985年

（1988・9・19）